

第 18 回環境NPOリーダー海外研修 報告書

特定非営利活動法人ひと・まち・これから
佐治 真紀

① 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本のボランティアリーダーとして生かせるか？

平成 27 年 10 月 19 日私たちは、自分たちの想いを形にするためともに学びに行くことになりました。到着後のミーティングで、改めて全員で自らの課題を言葉にし、それぞれの目標を再確認して研修はスタートしました。

10 月 21 日

ラインラント・ファルツ州 環境省情報センターで、ドイツにおける行政の役割を学びました。何事も想いを形にすることから始まります。目的なしには始まらないのです。目的を達成するために、企画し、実現する。活動には資金調達が必要であり、そのためには相手を納得させる情報が必要です。それらを踏まえ自団体を振り返ると、私たちの団体に専門家は不在ですので、外部との連携が必要であることがわかりました。また活動とは必ずしも大きなプロジェクトのことだけを指すのではなく、毎日の私たちの生活の中からできることを再認識しました。

午後は、ヘッセン州 ドイツ自然保護連盟 (NABU) ベンツハイム自然保護センターへ。野鳥保護活動からスタートした 100 年の歴史を誇る会員数 56 万人の団体です。到着後すぐに手作りの昼食をいただきました。センターのプログラムに参加している子どもたちが手伝いをして、外国からの訪問者である私たちに興味を持って接してくれました。センターでのプログラムは参加待ちの状態になるほど人気が高いそうです。またプログラムに参加しても自発的に行動しない子どももいる、とのお話から、どうやら日本とドイツの子どもたちを取り巻く環境は、かけ離れている状態ではないことが読み取れました。NABU の活動説明からは、活動していくためには情報共有が大切で、情報を多くの人に伝えるため広報活動が重要であることを学びました。「わたし」の意見が「わたしたち」の意見になるためには仕組みが必要で、その仕組みに自由意志で参加することから始まると教わりました。

10 月 22 日

午前中はボイムリンゲ「森のようちえん」へ。園児たちは毎日の活動を投票で

決めています。自分の意見を持つことが大切なのです。自分で決めたことに責任を持つことを幼いうちから自然に身に着ける仕組みが「森のようちえん」にはありました。また、このようちえんは森林局との協力で成り立っており、その点も、今後日本でも検討してみたい点であります。

午後はファンドレイジングアカデミーへ。

地質学者のリッターシェッヘルさんより講義を受けました。地質調査のための発掘作業に資金が必要となり、その調達をなさってきた方です。現在では、資金調達の専門家としても活動しています。ファンドレイジングとは資金調達のことです。その一つが寄付を募るという方法です。これは神様に捧げものをするにより、安らかな気持ちを与えられる、という宗教的考え方に基づくことでもあります。特定の宗教によるものでなく、どの宗教も貧しい人を助けよう、という教えが根底にあるのです。またドイツも高齢社会を迎えており、遺贈の先として寄付があることを知りました。寄付とは相手の意思により成り立つものです。相手に寄付のチャンスを与える、と考えていることを知り、驚きました。相手は善い行いに参加したがつている、と考えると、私たちが行うことは「お願い」ではなく、「情報を交わすこと」になるのではないのでしょうか？そのためにも、自分たちの想いを明文化することが喫緊の課題であります。

10月23日

午前中 ドイツ環境保護連盟 (BUND) ラインランド・ファルツ州支部へ。

1970年代のゴミの集積場の反対運動から活動はスタートしました。会員数は50万人です。団体組織の説明を受け、現場の実働グループの情報が組織の上部に伝わる仕組みが出来ていることを学びました。そこには青年の意見も取り入れられるのです。専門家の情報を組み入れ、州政府に情報を提供し、また意見を求められています。活動を支える資金のうち寄付が多く占めていることから行政との立場は公平中立です。自然の課題を解決することにとどまらず、環境というもうひとつ大きな枠組みで、私たちとの接点を考える活動を行っていることに共感が集まり、会員数を増やしています。エネルギーという目に見えないけど、私たちの生活に直結している課題にも取り組んでいます。フクシマの事故がドイツの政治に大きな影響を与えていることを直接お聞きしました。ドイツでは現在7つの原発が稼働していますが、2020年までに廃止が決定しています。しかしBUNDではその状況に満足せず、少しでも早い段階で稼働が終わるよう働きかけています。

午後はヘッセン州パルメンガルデンにて環境ボランティア制度について説明を受けました。ドイツでは青少年の人材育成の面から、自由意志により環境や福祉の分野で1年間研修する制度が設けられています。この制度に参加すること

により、青少年はその後の人生を考える機会を与えられています。ドイツでも30年ほど前から、子どもが自立する時期が遅くなっていると認識されており人材育成の面から制度が設立され現在に至っています。今回は、実際の研修生による植物園の案内ツアーを体験しました。決められたマニュアルを話すのではなく、自分の頭で考え実行する。そのことを辛抱強く見守るスタッフがいます。制度への参加者は必ずしも環境に熱意をもっているから参加しているわけではなく、自分を見つめ直すために就業体験に参加しています。9割の研修生は「やってよかった」との感想を持っています。研修の受入れ先は、若者を受け入れることは組織にとって新しい風が吹くことであり、新たな視点を得ることができるなどの理由により、費用を負担してまでも受け入れています。このことから人材育成は本人にとっても、組織にとっても課題であり、同制度のように双方が一緒に学びあえる仕組みがあることはとても重要であり、自団体に置き換えて考えると、受け入れる人員をどの年齢層から選ぶのか、機会の提供をすることが可能であるのか、じっくり考えてみる必要があります。

10月24日はドイツ環境保護連盟（BUND）ノルトラインベストファーレン州支部を訪問。

州支部では原発や石炭などエネルギーが最大のテーマです。州支部には25000人の会員がいます。BUNDは行政からの資金提供を受けていないので、行政に対し異なる意見を述べるのが可能です。地元の小さな活動から意見を集約する仕組みが出来ており、州支部ではその意見をもとにロビー活動を行っています。多数意見が必ずしも全体の総意でないことに対し、粘り強く意見を述べ広く一般の方に伝えるために広報活動をしています。このように州支部の役割は活動をまとめ、つなげるにより積極的な環境保護に導くことにあります。午後は近くにある石炭の露天掘りで有名なガルツバイラー炭鉱を見学しました。1980年代に炭鉱に指定され、民意を反映した州政府の方針により計画は実行されてきました。州支部は10年間以上交渉してきましたが一部の町は2011年に強制収用されました。BUNDはエネルギー会社を提訴し最高裁で勝訴しました。計画当初は住民の為になると考えられていた火力発電の開発に関し、強制力を行使することはよくない、との判断が下されました。その後見学した強制収用された町は人気がなく、住民のコミュニティを破壊してまで行うことの意味を考えさせられました。自分たちの使うエネルギーのため、自分たちの生活を変えざるを得ない状況になる。眼前で、エネルギーを使ってエネルギーの元を掘り出し、運び、煙になる様を目の前にするのは生まれて初めてでした。世界でも、日本でもエネルギーを必要とする生活を見直す時が来ていることを多くの人に伝えるため、広報する覚悟ができました。

10月25日

午前中はビンゲン郊外にあるドイツ自然保護連盟（NABU）ヘッセン州 ラインナウアー自然保護センターへ。解説者のエーゲリングさんは18年前からセンター長です。この地域は川の水が増えると川の周囲が湿地帯になる環境です。16年前からカエルのロゴを使用する会社との協働事業が行われています。センターではカエルの生息に適した環境の保全を目指しています。企業はカエルの生息地を守る事業に対し、企業のイメージアップの一環として資金提供を行っています。このように協働が長く続いていることは、双方の利害が一致していることの表れだと思います。自団体でもこのようなパートナーシップを結ぶことができるよう事業を提案していくことを考えて実行します。

午後はドイツ自然保護連盟（NABU）ラインヘッセン・ナーエ支部へ。

支部の役割は現場グループの取りまとめ及び広報、セミナーです。この地域には6つのグループがあります。会員は1万人です。年間150のイベントをしています。会報紙は2500枚発行しています。来年度は3000枚に増刷予定です。地域の新聞に200回載りました。この事務所は広報活動するだけでなく自然保護についての質問に答える場でもあります。住民に協力を要請しツバメの巣箱を設置する活動をしています。参加した家にはプレートを掲示してもらいます。そのプレートは住民にとってもNABUにとっても自然保護活動を行っている証になります。このような良い行動を助長するような活動は、自団体にとっても取り入れやすい活動であり、来年度の事業の中で早速取り入れてみたいと考えました。屋外の畑にてワインの試飲。戸外にテーブルを設置し、私達の来訪を持っていてくださいました。注いでくださったワインは、陽の光を浴びて金色に輝いていました。その光景は私達の心をとらえるに十分な力を持っていました。食べるものは誰にとっても身近な課題であり、その視点で広く市民に訴求することは、どの国の人にとっても効果の高い方法であることを改めて実感しました。環境保護活動を個人の生活に結び付ける手段として食の視点からアプローチしていく事を、活動の柱の一つと考えている私たちは、間違っていない、と確信する出来事でした。

10月26日

ヘッセン州環境省にて。

州環境省の枠組みの説明を受けました。ヨーロッパの重要なテーマはゴミ処理です。以前はゴミをいかに処理するかを考えていましたが、現在では、いかにゴミを出さないかという点に注力しています。生活ゴミの3分の2をリサイクル、リユースしています。私たちの毎日の生活が、積もり積もって大きな課題を引き起こしている事に気がついている人は、どれほどいるのでしょうか？課題を

考える時、自分の生活に密着していることから行動を変える事は、誰にとっても参加しやすいです。その部分の重要性を私たちももっと考え直し、自団体の活動に取り入れたいと思いました。

午後は昨日もお話くださったミヒャルスキーさんの案内で、バングラーフエンシュタインへ。

ナーヘ川のほとりで川やそこに住む鳥やヘビやカエルのお話を聞きました。紅葉に包まれた美しい川の風景は、何より雄弁に私たちに語り掛けてくれました。ナーヘ自然保護センターにて、ヘビやカエルの実物展示を見学。ボランティアのマティアスさんによる解説と体験学習。ボランティア活動のやりがいを伺ったところ、「喜びは毎日の中に沢山あるのに、皆は見過ごしている。それを教えてあげる事はとても嬉しい」と話してくださいました。やりがいを感じる活動によって、地域のグループ活動が支えられている現場を見ることができました。「好き」によって続く活動が、一番の根底にあること。私たちも忘れずにいよう、と心に刻みました。

10月27日

午前中は、ラインラント・ファルツ州アルツァイ市の公立幼稚園に併設された「森のようちえん」へ。

フィールドは森に来た人が遊ぶために元々あった広場です。活動小屋は森林局の建物です。子どもたちと私たちは一緒に手をつないで大きな輪を作り、朝の歌を歌ってくれました。お返しに私たちは同行の藤井さんの奏でる篠笛に合わせて「ふるさと」を歌いました。子どもたちは興味津々の様子で、静かに聞いてくれました。園長先生は手作りのおやつで私たちをもてなしてくださいました。一緒に働く同僚の発案を、行政に企画提案し2年の交渉を経て実現した公立幼稚園の中の「森のようちえん」です。町長への提案の中で、相手が知りたがっている情報を提供し、相手を納得させている点が学ぶべき点でありました。また保護者のニーズも把握しそれに沿った内容を提供することによりたくさんの方の共感を得ている点も、今後の参考にしたい点であります。自分たちのできることを提供することに満足するのではなく、相手のニーズを満たしてこそ、共感を呼ぶ活動になるという事例でした。

午後は宿泊先ホテルに戻り、有限会社 i F o u n d s - G e r m a n y のシュナイダーさんによるファンドレイジングの講義。ファンドレイジング中級者向けの内容でした。団体を大きくし活動を継続的にしていくためには寄付者をデータ化することが大切であると学びました。ファンドレイジングに関し事例の少ない私どもとしましては、

・環境や自然保護は企業のイメージアップの効果がある、という点に着目し、

来年度の事業にて取り組みます。その際に、相手先の規模にこだわる必要はなく、規模に応じた参加を募ることも有効である点が、私にとって大きな学びでした。

② 研修を通して、日本の環境ボランティアリーダーを支援するために、どのような仕組みが考えられるか。

今回の研修で訪問した先は、大きな団体です。しかしスタートは小さな活動からでした。ドイツの現在の方式をすべて取り入れるのではなく、今の日本にあった仕組みを新しく作り出すことが必要であると考えます。そのために研修で学んだ者同士がつながりあって、情報を共有し意見を交換していくことが大切です。現場の活動団体からの意見を柔軟に取り入れる組織が求められています。一人の意見では説得力を産まないことも、大勢の意見、専門家によって裏打ちされて意見には、人は耳を傾けざるを得ない、とのドイツの事例を肝に銘じ、様々な専門家とつながっていく方法も取り入れなければなりません。各団体の活動の内容により、一律に決めるのではなく、私たちが、自由意志により、行動を起こして新たな段階を切り開いていかななくてはと感じました。

③ 全体を通しての感想

今回の研修でドイツの事例を直接学び、担当者の意見を聴くことは、とても大きな気づきを与えてくれました。

- ・現場の意見を集約し、行政へつなげている → そのためには専門家との連携が必要である
- ・情報の共有が大切 → 広報を通して情報を伝えていく（私だけ、の情報にしない）
- ・特別なプロジェクトでなくてもできることがある → 毎日の生活で出来ることを実践する、伝える
- ・強制ではなく自由意志を尊重することが大切 → 幼いころから自分の意見を述べる環境を用意する
- ・課題の解決に時間がかかることがある → 中長期の計画が大切である
- ・人材育成が必要 → 自分一人ではできることに限りがある 「責任」を考え、新しい風を受け入れる
- ・他団体との連携が必要 → 自団体の規模にかかわらず、他団体との関係を構築する必要がある

研修に参加したことにより、全国に想いを共有できる仲間ができました。同じ情報に触れ、意見を交わすことの大切さを改めて実感しました。これからも情

報を共有できる仕組みが出来上がるよう、私たちにできることを考えます。
個人的には、自らの想いを明文化し、ホームページやパンフレットなどで、広く情報を伝えていくことから始めます。
よりよいこれからの為に、私たちにできることを、小さなことから始めます！